

## 日本音楽を題材にした日本事情の授業の試み

作田奈苗

### 要 旨

日本事情の授業の一環として、日本伝統文化の紹介を目的とした授業は必ずといって良いほど行われるものである。今回は、その伝統文化の中でも特に音楽、それも日本の代表的楽器である三味線を用いた音楽に焦点をあてた授業を行った。劇場音楽の性格が非常に強い近世三味線音楽を説明するためには、併せて歌舞伎などにも触れることがどうしても必要になるが、授業の焦点はあくまで音楽の鑑賞の手引きということで行った。授業は1994年12月7日、14日と、二回にわたって行い、一回目は概論的な説明を中心に、三味線音楽の用法、歴史などの紹介を行い、二回目は具体的な一曲、長唄「勧進帳」をとりあげて、ドラマ背景なども交えて解説、鑑賞した。これはその授業の報告レポートである。

### 【キーワード】

日本事情    伝統芸能    三味線音楽    歌舞伎    長唄

### 0.はじめに

日本事情と称する授業で紹介する日本文化が、必ずしも伝統文化である必要はない、というのは既に常識であろう。学生の日本語のレベルや、日本に関する知識の内容によっては、この種の授業は全く的是はずれたものになる可能性さえある。となれば、今や一般的日本人にとってさえ、もはや郷愁を感じる対象でしかない日本古典音楽を、授業の中でとりあげる意味がいったいどこにあるのだろうか、という疑問がここに持ち上がってくることになる。

しかし、わざわざ日本の大学に留学して日本のことを学ぼうという程の日本語学習者にとって、茶道や華道、能や歌舞伎などという伝統文化が、やはり充分に興味の対象になり得る分野であることもまた、疑い得ない事実である。言ってみれば彼らは日本文化の知的探検者なのである。その彼らに、日本を理解する一つの鍵として情報を提供するというくらいの意味は、少なく

ともこの種の授業にはあるのではなかろうか。

また、恐らく世界的な現象として、若者は自国の古い文化に対して知識も経験も持たなくなっている。そして、逆に、その国にとっては外国人である若者が、全く自分の民族とは関係のない他の国の伝統文化に魅せられて研究に打ち込む姿も多く見られるようになった。つまり、もはや民族文化の担い手は同じ民族の新世代とは限らないという現象も、今後世界的に起こってくる可能性があるのである。それを踏まえたとき、この種の日本事情の授業が、新しい意味を持って浮かび上がることになるのは間違いないであろう。

今回、その日本伝統文化の中でも、特にトピックとして音楽を取り上げたのは、一つにはたまたま個人的に伝統音楽に興味があったからであるが、また幸い、授業に参加する留学生の殆どが、別に伝統芸能に関する授業をうけていたので、これに便乗するような形で、特に近世三味線音楽にテーマを絞ることができたのである。

授業はまず、三味線の音楽に馴染ませること、そして、ある程度、知的好奇心を満足させられるような概論的知識を与えることを目的として計画を立てた。その過程では、三味線音楽と縁の深い歌舞伎にはどうしても触れなくてはならないのだが、歌舞伎については前述の伝統芸能を学ぶ授業で、ある程度の知識を補えるのを理由にして、深入りはしないようにした。

また、三味線の音に触れる一環として、劇場の下座音楽を用い、音楽から舞台の場面を想像させ、どの程度、想像できるものなのか、アンケートをとって、学生の反応を調査した。

## 1. 教案と授業内容

### 1.1 第一日目の授業

#### 1.1.1 目的

- ・ 三味線の実演で楽器の音に馴染ませること
- ・ 楽器の紹介（構造、出自等）
- ・ 三味線音楽に対する学生の反応の調査

### 1.1.2 教案と授業内容

①三味線の演奏…その場面を目の当たりに見せ、学生の注意を引き、その後、学生に楽器を触らせて、楽器の構造や音の仕組みを具体的に説明した。

②ビデオを鑑賞…舞台上、どのように演奏されるのかを示すために、演奏場面をビデオを見た。ビデオの内容は次の通り。

歌舞伎舞踊「鏡獅子」の長唄

歌舞伎舞踊「初音の旅」の清元

歌舞伎「絵本太功記」の義太夫

③周辺の楽器の紹介…三味線音楽に共に用いられる、大小鼓、太鼓、能管の四種類の楽器は、もともと能楽に用いられていた楽器なので、能のビデオを見せて、知識を補足した。また、興味のある学生が、後で参考に出来るように写真や資料の教材を配布した。

④アンケート…三味線音楽について、クイズのような形でアンケートを行った。芝居で用いる代表的な効果音楽を学生に聞かせ、どんな場面を想像するか選択肢の中から選ばせるものである。また、アンケートの中には、それぞれの感想、意見などについても書かせた。

### 1.1.3 結果

①三味線の実演でまず学生の興味を引くことにしたのは、平田教授の指導によるものである。最初から歴史的背景の説明などで始めては、学生が取っつきにくいからである。これは非常に効果的で、学生はすぐに興味を持って授業の中に入ってきた。また、実際に楽器を触らせてみる、というのは長友教授の助言によるが、これも成功だった。恐らく、最初に「そもそも三味線とは」というようなことから始めると、こんなに学生の好奇心を呼び覚ますことはできなかったであろう。

②いろいろな三味線の音楽を示すために、長唄、清元、義太夫と三種類の演奏場面を見せたが、これは、必要がなかった。二回目の授業は、長唄にテーマを絞ることになっていたのであるから、長唄だけの紹介をじっくりした方が適当だった。

③三味線以外の楽器に関しては、舞台のビデオは見せたのだが、これは学

生の興味を引くことはなかった。小鼓一挺でも実物を見せることができれば効果は上がっただろう。

④アンケートについては後述するので、ここでは述べない。

## 1.2.第二日目の授業

### 1.2.1 目的

- ・長唄「勧進帳」の鑑賞（ドラマの背景、音楽表現などに説明を加えながら、学生の理解を助ける）

### 1.2.2 教案と授業内容

- ①三味線音楽と歌舞伎の関係の確認…前回の授業で説明したことを踏まえて説明。学生の参考に供するために日本音楽の年表も配布した。
- ②「勧進帳」の紹介…実際の歌舞伎のビデオを鑑賞。現在も最も人気のある演目であるということ（新聞の人気調査の記事を示した）、能を歌舞伎化したものであることなどにも触れた。「勧進帳」を選んだのは、歌舞伎にとっても、長唄にとっても、分野を代表する人気作品で、かつ、登場人物も、日本人ならば必ず知っているような英雄、源義経と弁慶であるからである。
- ③物語の歴史的背景の説明…歴史上の人物である源義経については、別途資料も用意した。「判官轟頂」などという言葉についても紹介した。
- ④長唄「勧進帳」の演奏…三味線一挺、唄一枚というこの曲にとっては変則的な形態で行った。しかも、一曲を通して演奏するのではなく、ストーリーを説明しながら場面を区切り、分かり易い部分を中心に演奏するという形にした。演奏する場面については現代語訳付きの歌詞集を用意した。唄を唄ったのは、小塩さとみ氏である。
- ⑤唄の練習…学生に実際に唄わせた。実際に自分でやってみると、理解が進むと考えたからである。
- ⑥意見交換…それぞれの国の音楽事情などについて自由に意見交換した。
- ⑦授業全体に関する質疑応答

### 1.2.3 結果

①～③説明や、紹介などは出来る限り軽くして、演奏の鑑賞などに時間を  
使えるように配慮したが、時代背景などは講義形式の授業になってしまっ  
て、学生は退屈したようだった。

④演奏は、素人の、それも、演奏形態としては非常に地味な、素の一挺一  
枚という形態であったにもかかわらず、学生の鑑賞態度は熱心だった。  
用意した資料や、事前に詰め込んだ知識も、鑑賞、理解に当たってかな  
り役に立っていた。

⑤唄の練習は唄を唄った小塩氏が指導した。本来は複雑な節回しを単純化  
して説明した後、学生に唄わせるという方法をとった。最初から、長唄  
の発声ができるわけではないので、とにかく声を出して唄ってみる、とい  
う方針で行った。特徴的な節を二種類試したが、人数が少なかったこと  
もあって、元氣良く唄ったという感じではない。効果については不明。

⑥最後にまとめとして、それぞれの国での伝統音楽の享受の仕方などに  
ついて発言させ、日本の事情も説明した。他の国でも、若い世代はもちろ  
ん、場合によっては年輩の世代でも伝統芸能や音楽には興味を持ってい  
ないし、親しみもないという意見が殆どだった。日本の状態と同じであ  
ることがわかった。

⑦この時出た質問を以下に参考に揚げておく。

Q「男性と女性で唄の高さは違うのか。一緒に唄う時はどうするのか。」

Q「女性が演奏することはあるのか。」

これらの質問は、勿論技術的なことに対する純粋な質問でもあっ  
たが、全員が女性の学生達が、日本社会での女性の地位を探ろう  
として出した質問でもあった。

Q「12月14日は何の日か。」

二回目の授業は偶然、「赤穂浪士討ち入り」の日に行われていた。

Q「黒沢映画との関係。」

黒沢監督の作品の中で「虎の尾を踏む男たち」という映画がある。  
これは歌舞伎「勸進帳」の映画版である。

## 2. アンケートについて

### 2.1 アンケートの目的

- ・歌舞伎下座音楽に対する印象の調査
- ・どんな場面でどんな音楽が使われているかということの紹介
- ・日本芸能の経験の調査
- ・個人的にどんな音楽を楽しんでいるかの確認

### 2.2 アンケート内容

実際のアンケートの内容は次の通り。

音楽を聴いて答えて下さい

これから聞こえる音楽がどんな場面を表しているでしょうか。

1回目を聴きながら、下線部の所にどんな感じがしたか（例えば、恐い、楽しい、など）を書き、2回目を聴きながら、その音楽にぴったりの場面を一つ、ア)～キ)の中から選んで下さい。

1回目 (どんな感じですか)	2回目 (下から選んで下さい)
1 ... _____	(       )
2 ... _____	(       )
3 ... _____	(       )
4 ... _____	(       )
5 ... _____	(       )
6 ... _____	(       )
7 ... _____	(       )

ア) 薄暗い夜、幽霊が出てきたところ

イ) 大きくて立派な宮殿やお屋敷の様子

ウ) 山の中で、時々コダマが聞こえてくるような場所

エ) のどかな田舎の田園の様子。

オ) 雪が降って、どんどん積もっているところ

- カ) 広い川が流れていて、舟などが往来している
- キ) 激しい雨に雷も混じっている

#### アンケートに答えて下さい

1) 今まで日本の伝統芸能を見たことがありますか。見たことがあるものに印を付けて下さい。

舞楽 能 狂言 歌舞伎 文楽 日本舞踊 落語 盆踊り お祭り  
その他…

2) 日本の伝統音楽を聞いたことがありますか。あると思うものに印を付けて下さい。

雅楽 謡曲 長唄 常磐津 義太夫 清元 端唄 小唄 地唄 箏曲  
その他…

3) 何か楽器を演奏しますか？

4) 普段どんな音楽を聴きますか？

#### 感想を書いて下さい

日本の楽器の音を聴いてどんな感じを受けましたか。

自分の国の楽器と較べてどうですか。

その他何でも書いて下さい。

### 2.3 アンケートの結果

アンケート最初の、下座音楽を聴いて、内容を当てるクイズの結果は次頁の表の通りである。音楽は二回聴かせ、一回目にはメモをとらせ、二回目に下の選択肢の中から内容を選ばせた。そして最後に、答えあわせをしながらもう一度聴いて内容を確認した。

この一曲一曲は、下座音楽という性質上、まとまった一つの曲ではなく、ある意味では効果音というようなもので、音楽とは言いがたい所もある。しかし、それだけに手軽で、全七曲聴いても五分しかかからない。

選んだ曲は下座音楽の代表的なもので、かつ、表象性が高いと考えられるものである。ただし、このクイズは、日本人でも歌舞伎を鑑賞する習慣のある人でなければ、全問正解するのは難しいのではないかと思われる。

一種の約束事の世界だからである。

例えば、正答数の少ない「佃合方」であるが、これは知っている人ならばどんな音楽の中で出てきてもこれを聞いただけで、「川の場面だな。」と思ひ浮かべる約束になっている。しかし、そんな約束を知らない外国人の学生には、当然、意図が通じていない。どんな感じか、という欄にも「激しい」「緊張感」などと、曲の意図と違った感想を書いた学生が多かった。

上記のクイズを行うに当たって、ある程度、日本芸能に触れたことのある学生と、そうでない学生で、正答数に違いがでる可能性もあると考えたので、念のため鑑賞等の経験の有無を尋ねた。結論から言うと、これは相関関係は無かった。正答数の一番多かった学生（5問正解）は歌舞伎を見たことが無く、また、逆に一番少なかった学生（1問正解）が能狂言、歌舞伎、文楽と多くの芸能を鑑賞した経験があったからである。

普段、どんな楽器を演奏しているか、どんな音楽を聞いているかという質問は、場合によっては、その音楽が、日本音楽の鑑賞に干渉があるかも知れないと考えて用意した。結果としては、殆ど全員、クラシック音楽、又はポピュラー音楽を聞いているという回答だったので、この点でも、学生間にバラツキはなかったと考えられる。

#### クイズの結果

下座音楽	(正解)	正答数 (10人中)
佃合方	(カ)	2
管弦	(イ)	2
雷鳴と雨音	(キ)	6
ドロドロとネトリ笛 (ア)		8
コタマ入り山オロシ (ウ)		3
空笛	(エ)	6
雪音	(オ)	6



## 2.4 学生の感想

紙幅の制限上、感想を全部紹介することはできないので、項目で列挙しておく。

- ・日本の楽器の音は自然音に近い気がした。
- ・音の種類が多くない。
- ・自分の国の古い音楽に近い部分があった。
- ・淋しく、悲しい感じがした。
- ・音に隙間がある。
- ・特にすばらしいとかきれいとかは感じられない。
- ・音楽ではないような気がする。
- ・聞き慣れれば、理解できるだろう。
- ・どの音楽が何を表しているかを知っていれば、楽しめると思う。
- ・日本の若者もこんな音楽を聞くのだろうか。

## 3. 反省と展望

### 3.1 反省

この授業の目的は、一つには、学生の日本文化に対する知的好奇心を喚起することにあったのだが、この点に関しては、先生方のご指導もあって、思った以上の成功を納めることもできた。しかし、欲を言えば、講師の技量や、どれだけの楽器を揃えられるかで、より高い効果を納められたと思う。

一日目の概論の授業では、ビデオを見せて、他の種目の三味線音楽にも触れたが、学生は理解できなかった恐れがある。寧ろそういう細かいことには触れず、長唄なら長唄の紹介を中心にするべきだった。ただし、何れにせよ、この説明はどうしても専門的にならざるを得ない部分なので、こういう紹介の仕方をして、理解しやすく、面白い内容にするのは難しい。それならばいっそ、この部分を省略しても良いのかも知れない。

二日目の授業に参加した学生が、一日目から半数に減少したのは休暇前の授業だったということもあるだろうが、やはり授業の進め方や内容に魅

力がなかったのであろうと反省する。また、トピックが特殊すぎて音楽に興味を持った学生にしかアピールできなかったという可能性もある。

### 3.2 展望

日本事情の授業を行うに当たって、音楽をトピックにするのは多少、普通ではないことなのかも知れない。日本人にさえ、馴染みのない分野だからである。やはり、伝統芸能の紹介という点では、能狂言、歌舞伎を扱うか、茶道華道を紹介するか、というのが普通であろう。この授業が、扱うトピックといい、授業の方法といい、一般性に欠けるという批判は免れ得ない。少なくとも、この授業を再現しようとしたら、「三味線弾き」一人と、「唄うたい」一人が必要になる。演奏の部分をビデオやカセットテープで代用することは出来るだろうが、それは、授業を退屈なものにする結果になるだろう。つまり、実演無くてはこの授業は成立しない、と考えられるのである。これが、この授業の重要な欠点でもあり、同時に特長でもある。

また、もしも、他に歌舞伎や能を紹介する授業がそのコースにない場合、音楽以前に、先ずそちらの説明に多くの時間を割かざるを得なくなる。そしてそれが不可能な場合は、今度は演奏する楽器を変えなくてはならないだろう。例えば、室内楽系の音楽をテーマにすれば舞台芸能との関わりは持ち込まずに済むわけである。実際に昨年度、徳丸教授が箏曲で授業を行っている。この授業は、箏曲の紹介と鑑賞を中心に行ったものだった。

伝統芸能の紹介という授業は最も安易に思いつく内容であるにも拘わらず、また同時に非常に難しい。しかし、授業中の学生の質問や発言を通して、学生達が、日本について見聞したありとあらゆる知識を総動員して、その記号をつなぎ合わせ、日本文化を彼女らなりに理解しようと手探りしているということが想像できる場面が何度もあった。この学生の作業を手助けすることが、日本事情の授業の役割の一つなのだとすれば、今後いかに効果的にこの役割を果たして行くべきなのか、研究を重ねていきたいと思う。

## 参考文献

- 「日本伝統芸能鑑賞入門」 平田悦朗 凡人社 1994  
「日本語教師のための実践日本事情入門」 細川英雄 大修館書店 1994  
「邦楽の世界」 山川直治 講談社 1991  
「日本の楽器・その素材と響き」 茂手木潔子 音楽之友社 1988  
「勸進帳いろいろ」 景山正隆 冬樹社 1989  
「義経伝説」 高橋富雄 中央公論社 1966  
「邦楽鑑賞入門」 吉川英史 創元社 1959

## 教材

- 「舞踊鳴物百選（黒みす）」東芝EMI TOCF-4060

## 謝辞

この実験的授業を行うに当たって、ご指導を頂いた平田教授、長友教授に感謝の意を表します。また、歌唱指導に効果的な手腕を発揮してくれた、人間文化研究科小塩さとみ氏のご協力にも感謝いたします。

(お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士2年)